neo

MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

Summer
2024
#04

新たな道を医療と共に。

neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

Contents

02
Doctor's Hand
福井大学 学術研究院 医学系部門　器官制御医学講座 外科学（2）
心臓血管外科 教授
福井 伸哉

12
Path of Pharmacy
福井赤十字病院 薬剤部
薬剤部 部長 **渋谷 貞一**　薬剤部 課長 **寺本 敏清**　薬剤部 課長 **大森　丈**

20
Very Human
福井大学医学部附属病院
看護部長
諏訪 万恵

26
Medical LANDSCAPE
福井厚生病院 院長
服部 昌和

STAFF

Project Design	坂口 俊克
Writer	上乗 繁能／白鳥 幸代／若井 憲
Photographer	藤森 祐治
Designer	吉田 真人／西村 恭子
Cover Design	101%

発行／スギメディカル株式会社
〒101-0044
東京都千代田区鍛冶町二丁目６番１号
堀内ビルディング２階
TEL: 03-3254-1335　FAX: 03-3254-1339
E-mail: t.sakaguchi@project-ishin.net

SUPPORTING YOUR
LIFE

新しい歩みを始めた日医工のミッションは、
SUPPORTING YOUR LIFE
「LIFE」には2つの意味が込められています。
人々の健康な人生を支え、
医薬品をつくる社員の人生にもよりそう。
あたりまえのことですが、忘れてはいけないこと。
医薬品で人々の健康を支えるためには、
品質はもちろん、その安定供給に努める
日医工のガバナンスや社員が働く
環境を整える事が大切です。
コンプライアンスを守り、品質システムの改善を継続し、
社内外から信頼される企業風土をつくり上げていく。
それこそが、新しい日医工のあるべき姿であると
心に刻み、一丸となって行動してまいります。

日医工株式会社

Doctor's Hand

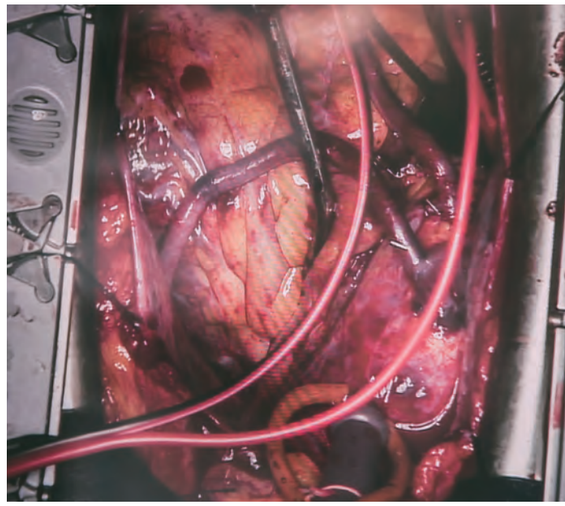
FUKUI SHINYA

福井の「心臓」を守る！
心臓血管外科医のパッション

2022 年 7 月、福井大学医学部附属病院に着任以来、福井伸哉教授は地域における心臓血管外科医療の質とマンパワーの向上に力を注いでいる。
ハードな心臓血管外科を志す若手医師の増加に加え、地域の基幹病院との連携を深め、緊急性の高い患者を県外に流出させない。
福井に残って一流の心臓血管外科医として活躍する、人材育成の一旦に迫った。

neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

Doctor's Hand



手術や症例数を倍増

兵庫県尼崎市。県の南東部に位置し、人口45万人を数えるこのまちには、急性期の総合病院や公立病院、専門病院、クリニックなどが集中する。大学病院がある神戸市や大阪市にも近く、患者にとっては受けたい医療が身近に受けられる環境にある。

福井伸哉教授は、福井大学医学部附属病院に着任する以前、尼崎市内のとある総合病院に勤務していた。その病院は、がんの拠点病院ではあったものの、循環器系の疾患は近隣の同規模病院に比べて手術件数や症例数が少なく、専門性の高い治療が必要な患者は、近隣の大きな病院に流れていた。

その病院の「心臓血管外科を立て直してほしい」と大阪大学から派遣された。着任1年目から2年目にかけて、福井医師はみるみる患者数を増やし、手術件数や症例数をあっという間に倍増させた。

「世の中がコロナ禍の頃で、ステイホームで家にいる時間が長くなり、Web利用が進んだんですね。着任してすぐネットによる市民講座とか、開業医の先生向けの講演とか、製薬会社さんを通じてこまめに発信したんです。救急隊に24時間患者さんを受け入れるとプレゼンしたり。当たり前のことをしただけですが、ある時から開業医さんからの紹介が増え、病院のホームページを見た市民の皆さんが気軽に足を運んでくださるようになったんです。医療の競争が激しいところですから、かかりつけ医に相談したり、より良い医療を受けることに患者さん自身が前向きなんですね。市民の健康意識が高いのもあって、患者さんや手術件数の増加につながったのだと思います」

メインは、Webやホームページを使った情報発信だが、都市部では情報の質が患者の動向を左右すると言っても過言ではない。もちろん、心臓血管外科の分野における福井医師の手術実績や症例数の多さも、信頼を勝ち取るには十分だった。その実績が評価され、福井大学医学部附属病院の教授に推薦されたのだった。

心臓血管外科医療を完結

着任にあたって、福井教授は「心臓血管外科の手術件数を増やし、県内の心臓血管外科医療を安定させ、一流の外科医を育て上げる」ことを自らのミッションに掲げた。前任地での成功体験をもとに、Webで市民公開講座や開業への情報発信などをこまめに行い、循環器系の患者数と手術症例数を増やすことに情熱を傾ける。

ところが1年が経ち、2年が経過しても、患者数は多少増えても、思ったほどの成果に繋がらない。何が違うのか？着任から2年半余りが経過したころ、福井教授は一つの結論と方向性を導き出す。

「尼崎と大きく違ったのは、地域事情と県民性です。福井県は市内にある基幹病院と地域の病院やクリニックとの連携が昔から長く維持されていて、その関係は容易には崩れません。患者さんはネットなどの情報より、かかりつけ医の紹介で病院を選ぶケースが多いので、福井の北部にある当院は市内の病院より地理的に不利です。それもあって、私の専門である心臓血管外科に関しては、市内にある医療施設と連携して、福井県内で心臓血管外科医療を完結できるようにしようと考えました」

冠動脈疾患や大動脈弁狭窄症、低侵襲僧帽弁手術など心臓血管系の大きな手術が行える医療機関は、県内

では福井循環器病院、福井県立病院、福井大学医学部附属病院の3施設しかない。それゆえ、3つの病院が患者を取り合うのではなく、むしろ連携を深め、緊急患者などを県外に流失させないことが重要だと判断した。

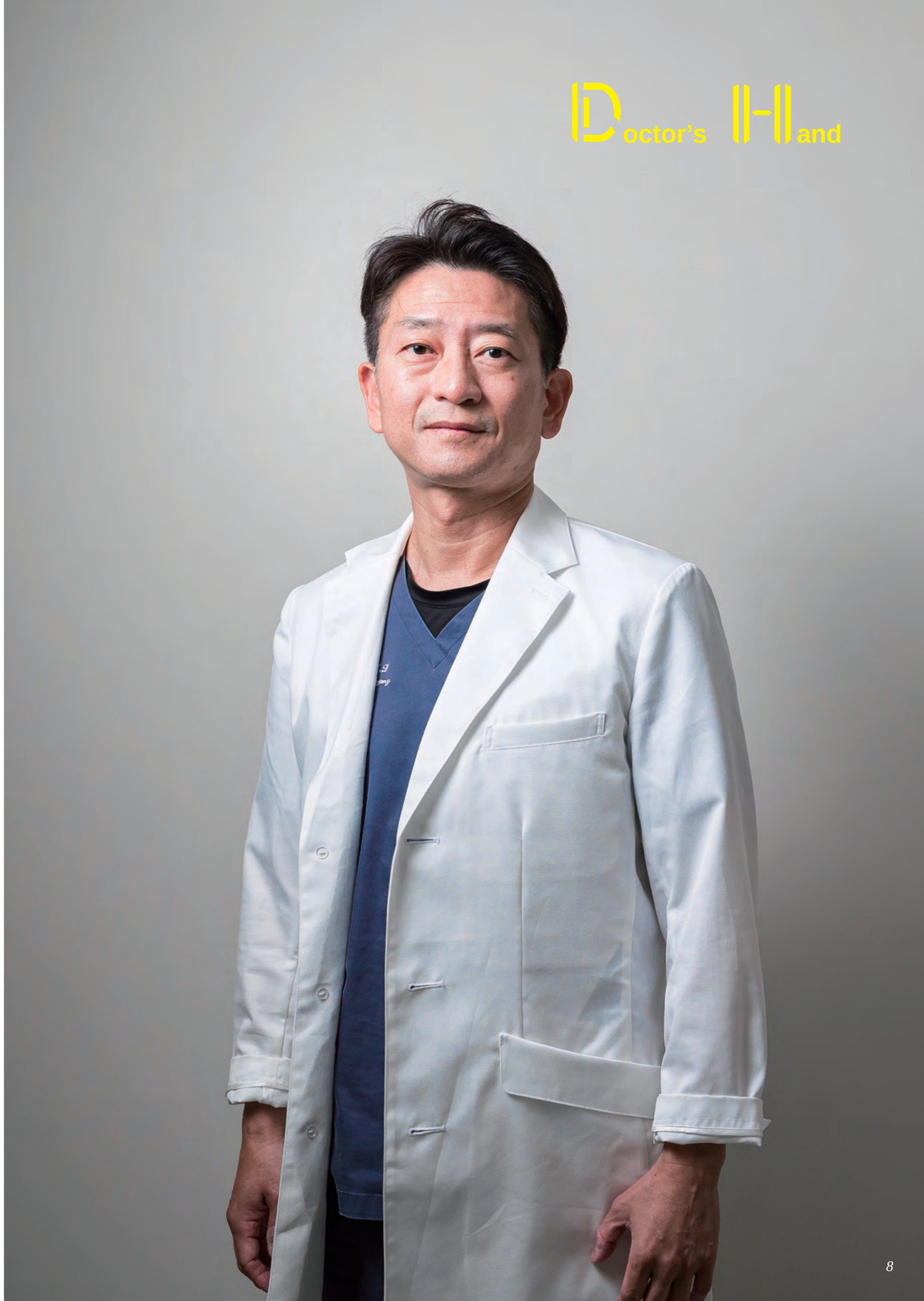
「幸い福井循環器病院は、私の出身大学である大阪大学からの医師派遣に頼っています。県立病院は同じく金沢大学から派遣されており、2つの病院はそれぞれの大学からの医師派遣が難しくなると、将来的に診療科が維持できなくなる可能性がある。そうならないように、大学病院として福井県内に残る心臓血管外科医を一人でも多く育て、供給できる体制をつくる。それが私の使命だと考え、入局者を増やすことに方向転換したのです」

医学生に外科の魅力を発信

外科志望の医師が少なくなっている今、福井県内で一流の心臓血管外科医を育て上げるのは容易なことではない。福井教授が着任した当時、「医局員は47歳が最低年齢で、入局者も少なかった」そのため福井教授は、入局者を一人でも多く増やすために「まず医学部の学生たちに外科医や手術の面白さを感じてもらう」ことから取り組んだ。

学生指導、手術指導、wet labo、ポリクリ（4年生から6年生の間に行われる臨床実習）中の患者診察の直接指導。できるだけ学生たち一人ひとりに声をかけ、顔や名前を覚え、出身はどこで、将来はどんな道に進みたいかなどコミュニケーションをとるようにした。医学生たちとの距離を縮め、外科や手術に対して興味や魅力を感じてもらう。医局内においても、心臓外科と末梢血管外科を棲み分けし、お互い協力しながら運営するようにした。結果、レジデント（研修医）が2名入局し、最低年齢も26歳と若返った。

「入局後は、県立病院、福井循環器病院をローテーションすることで様々な術式、症例数を経験してもらいたいと考えています。心臓血管外科疾患に関しては、福井市内は福井循環器病院と県立病院、三国、芦原、越前、敦賀は、当院に患者さんが搬送される体制をとっています。嶺南地域には、越前市の中村病院を大学の新たな関連病院にしました。ここでは、現在心臓血管外科の医局員が1名常勤しており、末梢血管の



専門病院として透析シャント、静脈瘤の手術などを行なっています」

体力と技と現場主義

もともとエンジニアになるのが夢だった福井教授は、「東大理一か京大工学部電気電子工学科に入って将来はソニーかパナソニックに就職する」道を考えていた。しかし高校3年生の夏休み、祖父が亡くなる直前に入院していた病院の担当医が高校の先輩だった。その人から「(祖父が)孫も医師になるといっていた」と聞かされたのが縁で、医師の道を志す。

大阪大学附属病院の研修医時代には、「365日のうち340日は病院に泊まっていた」ほど、伝説の心臓外科医として極めてハードな日々を送った。日本初の脳死心臓移植の手術が行われた時に主治医に指名されるなど、数多くの経験と実績を積んだ人でもある。その福井教授が、心臓血管外科を選んだ理由をこう打ち明ける。

「心臓は固定臓器で、その場所から動かせません。外科医が手術しやすいように一旦、体の外に出したりできないからこそ高い技術が求められる。患者さんが元気になるかどうかは、術後管理を含めて外科医の手術にかかる比重が非常に大きい。心臓の機能をきちんと制御できるかどうか、すべては外科医の手技できまるのです」

安全、安心な手術に命をかけ、とことん技術を磨く。同時に、長時間の手術を乗り越える体力と集中力も求められる。医師の働き方改革が叫ばれ、過重労働が見直される中、福井教授は、これからの若い人たちにどんなことを期待するか？

「今の人たちはスマートで優秀で、身なりもきちんとしていて我々の若いころとは全然違います。それは仕方がないですが、心臓血管外科医はある意味、体力勝負。仕事を淡々とこなすだけでは医学生に興味をもってもらえません。手術はもちろん、術後もICUに行き、ベッドサイドに足を運び、モニターの数字やデータに異変があれば、患者さんの手足や体に触れて、話しかけてみる。数字やデータだけを鵜呑みにして原因を探ろうとしても、根本的な問題には近づけません。何が起きて、なぜそうなったのか。本当の原因は、患者さんに触れて、会話して、様子や情報を探ってみないことには辿り着けない。これからの人たちには是非、挑戦欲や競争意識を身につけてほしいと思います」

福井の心臓を守る。一流の心臓血管外科医を育成する福井教授の挑戦は、まだ始まったばかりである。

福井 伸哉（ふくい しんや）

福井大学 学術研究院 医学系部門
器官制御医学講座 外科学（2）
心臓血管外科 教授

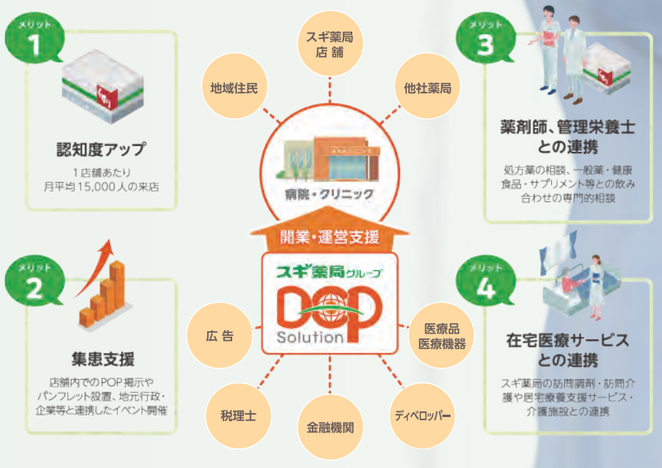
［略歴］
1998年　大阪大学医学部医学科卒業 大阪大学第一外科研修医
1999年　大阪警察病院 外科
2001年　桜橋渡辺病院 心臓血管外科
2003年　大阪大学医学部附属病院 心臓血管外科
2004年　大阪大学大学院医学系研究科 未来医療開発 博士課程
2007年　兵庫医科大学 心臓血管外科 助教
2016年　大阪急性期総合医療センター 心臓血管外科 副部長
2020年　関西労災病院 心臓血管外科 部長
2022年　現職

スギ薬局グループ

ドラッグストア併設で
理想の開業を！

DCPソリューションの提供サービス

経営理念、診療方針の作成
開業までのスケジュール作成
開業地の選定、診療圏分析
事業計画の策定
融資の打診及び交渉
設計、内装業者紹介及びアドバイス
医療機器選定
税理士、公認会計士の紹介
広告相談
従業員募集、採用、教育の補助
開設手続き
開業後の経営支援、拡大展開
継承支援



DCPソリューションは
豊富な経験とネットワークを持つ
先生方のよきパートナーとして
開業支援サービスを提供しています。

開業の事例や
先生方の声が
ご覧頂けます

https://dcp-sol.com/article/docvoice/

DCP Solution

0120-911-545
平日（土曜・日曜・祝日を除く）の9時00分～18時00分

拠点

関東エリア（本社）	●東京都千代田区鍛冶町二丁目6番1号 堀内ビルディング2階
中部エリア	●愛知県大府市横根町新江62番地1号
関西エリア	●大阪府大阪市淀川区宮原4丁目4－48
北陸・長野エリア	●石川県金沢市藤江北4丁目280番地

Path of Pharmacy

薬のスペシャリストたち 百年の変革に臨む。

多様な業務をこなす多才な薬剤部

福井赤十字病院は病床数５２９床、県内3位の病床数を誇る地域医療支援病院であり、２０２５年には創立１００周年を迎える。薬剤部は、病院設立と同時に開設された歴史を有する。現在の人員は31名、調剤課・製剤課・医薬品情報課から成る。主な業務は調剤・製剤・注射調剤・無菌調製・抗がん剤調製・医薬品情報・病棟業務・チーム医療・医薬品管理・医療安全など多岐にわたる。２０２４年5月現在、外来処方箋枚数一日平均５３７枚、入院処方箋枚数２５０枚に上る。

こうした膨大な業務支援に適切に対応するために、注射薬自動払出システム、全自動錠剤分包機、散薬調剤ロボット、一包化錠剤仕分け装置、一包化監査システム、調剤鑑査システム、抗がん薬調整支援システムなどを積極的に導入し安全性の向上、業務の合理化を図っている。

「薬剤師の業務は、患者さんを中心とする対人業務に大きくシフトしています。当院薬剤部では『専門的な知識に基づいたわかりやすいコミュニケーション』を目標に掲げ、患者さんが安心・安全、効果的にお薬を使用していただけるよう努めています」渋谷貞一薬剤部長はこう語る。

病院薬剤師は、調剤や薬剤の説明を行う医療者、というのが一般的な見方かもしれない。実際は、病院内の様々な場面で重要な役割を担っている。たとえば、いろいろなチーム医療で薬剤師は活躍する。栄養サポートチームでは、輸液や薬剤の選択、経口・経鼻・胃ろう・点滴など適切な栄養摂取方法を提案する。糖尿病サポートチームでは、日本糖尿病療養指導士の資格を持つ薬剤師がベッドサイドでの服薬指導、また、糖尿病の薬物療法について講義を行う。がん薬物療法認定薬剤師は医師と協働し、レジメン（治療計画）の作成と管理に携わる。レジメンには、抗がん剤や輸液、副作用を抑

える支持療法などの投与について詳細が記されている。感染制御チームでは、感染制御認定薬剤師や抗菌化学療法認定薬剤師が感染症治療に関わる。このほか、緩和ケアチーム、摂食・嚥下支援チーム、褥瘡チームなどにも薬剤師が参画する。

医療の質を高める専門性

福井赤十字病院の感染管理室には、抗菌化学療法認定薬剤師の寺本敏清課長が専任として全日勤務している。また、他2名の薬剤師も業務に携わっている。一般に、多くの病院において、薬剤師が感染対策チーム（ＩＣＴ）や抗菌薬適正使用支援チーム（ＡＳＴ）として感染管理や抗菌薬適正使用に関わる時間は、半日あるいは数時間程度。感染症治療における薬剤師の全日勤務は、発症早期でのＡＳＴの関与を可能にし、治療におけるメリットは大きい。この点は、福井赤十字病院薬剤部の第一の特長といえよう。

細菌感染症の治療における抗菌薬の使用は、最も効果的な薬を選択し、適切なタイミング・量・ルート・期間で投与することが重要である。同時に、薬剤耐性菌の出現や抗菌薬の副作用を早期に察知し対応することも必要とされる。

「各種ガイドラインなどを駆使し、抗菌薬治療のバックアップを行うことが、私の使命と考えています。抗菌薬による相互作用や副作用、そして感染症発症に伴う治療期間の延長を、できる限り回避できるよう日々努めています」と寺本課長。

実際、最近の成果がある。感染性心内膜炎（ＩＥ）は、心臓の内膜や弁膜などに疣腫（細菌の塊）を形成し菌血症、血管塞栓、弁障害、心障害などの多彩な臨床症状を呈する全身性敗血症性疾患と言われている。原因菌としては黄色ブドウ球菌や連鎖球菌による発症が多いと言われている。早期の診断、治療開始が重要と言われているが、特に脳梗塞を合併する疾患に対しての薬物治療は難航する場合が多いと言われている。寺本課長らＡＳＴが関与したのは、黄色ブドウ球菌による感染性心内膜炎の症例である。原発巣不明で診断に苦慮され、ＡＳＴでも抗菌薬の選択に難渋した。臨床症状、各種検査結果よりＡＳＴでも検討し、territory 外とはなってしまったが、ＩＣＤ（Infection Control Docotor）からＩＥの可能性について打診した。

その後循環器内科で合併症を伴うＩＥの診断（黄色ブドウ球菌によるＩＥと脳梗塞の合併症）がつけられたが、ガイドラインでは決定的な抗菌薬選択の記載がないため、ＡＳＴで十分に検討し抗菌薬の提案を行った。患者は手術治療と抗菌薬療法を経て、経過から心配されたほどのＱＯＬ低下もなく退院が出来たという。

災害救護への注力

福井赤十字病院薬剤部の第二の特長は、日本赤十字社の根幹事業である災害救護に、福井赤十字病院薬剤部が尽力していることである。東日本大震災以降、院内の常備救護班全8班に薬剤師を配置し、これらの支援チームが被災地に派遣される際には薬剤師が同行する。

災害教育については、薬剤部員は、院内で行われる救護班員研修に積極的に参加しており、薬剤部内でも教育の場を設け、平時から災害時に対する意識を醸成する。また、被災地から帰った薬剤師が報告会を行うことで、次に派遣される薬剤師には助言となり、若手薬剤師には、いつか自分も被災地へ、という当事者性を感じるきっかけになっている。

令和6年能登半島地震では、日本ＤＭＡＴ隊員で日本臨床救急医学会救急認定薬剤師の大森丈課長は被災地で活動する薬剤師の後方支援を担った。救護班として派遣が決まった薬剤師に現地での活動についてアドバイスし、安心して活動できるよう声をかけた。

「被災地の救護活動では、支援チームのメンバーは、できること

は何でもやるというのが基本。その上で、おのおのの専門を担当します。たとえば、高血圧や糖尿病などの持病があり、自宅が崩壊して薬を持ち出せなかったという人がいれば、詳しく状況を聞き、医師が処方箋を書き、私たち薬剤師が調剤します。また、医師が専門外の疾患に対する処方をする際や、普段服用していた薬が分からない時には、薬剤の選択について相談を受けます」

充実した就労支援と教育体制

同院薬剤部のさらなる特長は、人材の確保と育成にある。福井県は現在、薬剤師が不足しており、厚生労働省の資料によれば福井県は将来にわたっても薬剤師不足が続くことが予想されている。その原因には、県内に薬学部がなく、薬剤師になるには県外に進学せざるを得ないこと、また、薬学部は6年制で、経済的負担が大きいことなどが挙げられる。

「近年、実務実習を通じ、病院業務を経験することで病院勤務に魅力を感じてくれる学生が増えています。それゆえ、経済面から病院薬剤師を断念してしまうことを、私は辛く感じていました。当院では今年度から、薬剤師奨学金返還支援制度を開始し、就労支援に力を入れていきます」と渋谷薬剤部長。同院に常勤する薬剤師を対象に、年間60万円、最大360万円、最長10年間の援助を行う。

新人教育については、キャリアラダー制度を導入している。個々の能力に合わせ、目標に向けて段階的にキャリアアップする指導法だ。今年度からはメンター制度も導入する。指導を行うメンター(先輩職員)が指導を受けるメンティ(新人職員)に対し、実務上だけでなく、キャリア形成やメンタル面まで幅広いサポートを行う。

「メンターは、新人の悩みや迷いを聞き、アドバイスをする。年齢的に近いほうが話しやすいだろうということで、入職3、4年目の薬剤師がメンターを務めます」

不変の信念、進化する業務

福井赤十字病院では今年10月15日より院外処方に全面移行する。これまで、初診の患者に「院外処方、院内処方」の希望を聞くと、大半は院内処方を希望されたため、院外処方箋発行率は、わずか約5%。薬剤部の労力は調剤に集中し、これが渋谷薬剤部長らを悩ませてきた。

「院外処方に移行後は、当院薬剤部は、病棟業務に人員と時間を増やし業務の充実を図ります。退院後も安全に薬物治療が継続できるよう退院時指導にも力を入れていき、院外の保険薬局と情報共有できるように業務を拡充したいと思います。保険薬局では、患者さんへの薬剤の説明指導、他院の薬剤との飲み合わせのチェックなどが行われ、当院と保険薬局で密な連携を図ることで、患者さんの服薬状況が共有され薬物治療への更なるサポートの充実が期待できます。また、薬剤師外来も検討しています」

薬剤師外来では、病院薬剤師のサポートが必要と考えられる外来患者に対して、医師の診察前に薬剤師が面談を行い、服薬状況や副作用の有無を確認する。面談をすることで医師へ事前に処方の整理・提案ができ、患者への指導を充実させることで、外来診療の質を向上させられる。特に抗がん剤治療を受けている患者は、副作用が出現するリスクが高く治療に不安を感じる方が多いため、薬剤師外来による副作用マネジメントや抗がん剤治療の説明を行うことで、患者さんは安心して治療を受けることができる。

院外処方への完全移行については、大森課長の期待も大きい。

「薬学部在籍中は病棟業務を頑張りましょう、といった指導を受けるのに、『入職したら調剤ばかり』では、落胆されても仕方がない。病棟業務では、患者さんとの関わりは緊密になり、医師や看護師からはこれまで以上に頼られる。医療者としてのやりがいを実感できます。自分が若手だった時期、病棟に関わる時間があまり取れず、もどかしい思いを抱えていました。これから、若い薬剤部員は病棟の患者さんたちと大いに接して、充実感を感じてほしい」

渋谷薬剤部長は、薬剤師を目指す若人、また、同院薬剤部員にこんなメッセージを贈る。

「薬剤師は『薬』のスペシャリストとして生命と健康な生活を守る。病院薬剤師は、調剤だけでなく、薬の専門知識を活かして医師、看護師を始めとする様々な職種の人たちとチームで患者さんに向き合う。コミュニケーション力、思考力、行動力、共感力、そして誠実さ、全て大切な要素です。これらをもとに、生命と真摯に対峙するという強い責任感を持ち、患者さんや医療スタッフから信頼される薬剤師を目指してください」、「院外処方への移行に伴い、薬剤部の業務は変化しますが、患者さんが安全に効果的に薬を使うことを第一とすることに変わりはありません。薬剤部の目標を共有し、向上心をもって業務に取り組んでいただきたい。患者さんの微笑みを支え、私たちも微笑める職場づくりを目指し、共に頑張りましょう」

患者のため、という一心は変わることなく。10月15日、福井赤十字病院薬剤部の変革は始まる。その脈動がすでに聞こえている。

薬剤師 募集要項（令和７年４月採用）

■ **募集人員**
薬剤師　若干名

■ **応募資格**
令和７年３月に６年制大学を
卒業見込みで資格取得見込みの方
又は薬剤師有資格者

想いを伝える、力を貸してください。

変わりゆく時代に
新しい医療を

この度、第4号を発刊することができました。
取材に協力していただきました医療者の方・
協賛して頂きました企業様におかれましては
心より感謝申し上げます。
今後とも末永くご支援の程よろしくお願い申し上げます。

これからもわたしたちは、はたらく医療者の姿を、
地域の医療界全体へ発信してまいります。

協賛社募集

私たちは「医療情報誌 neo」の活動に
ご賛同いただけるスポンサーを募っています。

neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

Very Human

福井大学医学部附属病院

看護部長
諏訪万恵
Kazue Suwa

看護も看護師も「その人らしさ」を尊重したい。

Profile

1988年3月　福井県立短期大学　第一看護学科卒業　看護師免許取得
1988年4月　福井医科大学医学部附属病院　就職
　整形外科病棟、手術部勤務
2002年4月～　福井大学医学部附属病院　副看護師長
　（手術部、産科婦人科・耳鼻咽喉科科・泌尿器科混合病棟）
2013年4月～　福井大学医学部附属病院　看護師長
　（手術部・滅菌管理部、循環器センター）
2017年7月　認定看護管理者資格取得
2019年4月～　福井大学医学部附属病院　副看護部長
2020年3月　福井大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程卒業
2024年4月～　福井大学医学部附属病院　看護部長　現在に至る

最重要ミッションは人材育成

福井大学医学部附属病院は、福井県における高度急性期医療・先端医療を担い、地域の中核病院としての機能も併せ持つ、県内唯一の特定機能病院である。医師を始めとするチームの一員として病院機能を支えるのが看護師たちであり、２０２４年４月、諏訪万恵氏が看護部長に就く。

「副看護部長になった時、最初の１年は、自分自身に与えられた役割を果たす事で精一杯でした。翌年より私が担当したのは主に人材教育でしたが、自分がキャリアを積むうち、人材育成の重要性を強く感じるようになりました。特に業務担当副看護部長となった昨年は、教育担当として研修内容を追加修正し再構築してきたことが、現場で効果的・効率的に活かされていないのではと感じるようになりました。教育と看護実践が連動されていないと感じました。看護部長になり、教育で習得された知識や技術を看護実践の場面で根拠を持って実施できる人材を育成する、そして、実践した看護と自身を振り返り、次の患者に活かすことができる人材を育成していきたいと強く思い、看護部長になりたいと考えるようになりました」

看護部の理念は、「その人らしさを尊重した最適な看護」看護師は、患者やその家族に寄り添った看護を実践し、診療と日常生活の両方に気を配り、その人らしい健康的な生活の回復に向けて支援する。諏訪看護部長は、そんな看護師を育てることに力を入れている。

看護部では２０２１年度、五十嵐前看護部長から看護部理念と目標を変更するという提案があり、看護師長全員で時間をかけて決定。当時の諏訪氏は教育担当の副看護部長であり、理念や目標の改定を契機に、看護部における人材育成も検討することに。時代の変化とともに、働くスタッフ像が変化し、現状に合わせる必要があったからだ。目指すべき看護職員像・

教育目標・教育方針が改定され、教育委員会での研修目標や研修内容も見直された。さらに、看護部の弱みとなっていた、看護師一人ひとりの自立についても考察された。

看護部の弱点克服に努める

諏訪看護部長は言う。

「看護師のフィジカルアセスメント力を養う過程で何が不足していたのか、自身をリフレクションし、次に繋げていく能力を身に付けていく。そして、どうしたらキャリアを身に着けられるのかを考えるために、キャリアパスとキャリアデザインシートを作成しました。このシートを看護師長がスタッフ面談で活用することで、キャリア支援体制を整えることができました。このように、看護部では看護師一人ひとりがキャリアアップに取り組み、やりがいが持てるよう積極的にサポートし、人としての成長、そして看護師としての成長が仕事のやりがいとなる

PNS

Partnership
Nursing
System

University of Fukui Hospital
Original method of
providing nursing care

供方式 Partnership Nursing System（PNS）と働きやすい職場環境だ。

PNSとは、看護師が安全で質の高い看護を共に提供することを目的に、対等な立場で、互いの特性を活かし、日々の検温、処置、ケア、記録を実践する。また、委員会活動、病棟内の係の仕事など、1年間を通じて活動し、その成果と責任を共有する看護体制である。日々のペアでは、患者の観察点やケアのポイント、患者を支援するコミュニケーションの取り方など看護実践と臨床判断のスキル、経験知や暗黙知を先輩看護師から直接学ぶことができる。また、患者に寄り添った看護が提供できるよう、ペア間で互いの思考を共有し、看護実践している。こうしたPNSは全国から注目を集め、これまでに多くの見学者が訪れている。

もう一つの強み、働きやすい職場環境である。少子化社会における労働人口減少の煽りを受け、人材確保に難渋している。ちなみに、福井県の出生率は、1・46人 全国6位。また、共働きの多い県でもある。

福井大学医学部附属病院看護部には、今年6月1日現在、産休・育休者79名。育児部分休業取得者は144人で、育児をしながら働くスタッフが看護師全体の約2割を占める。育児部分休業は福井大学全体で導入されており、小学3学年までの子を養育中の職員は、1日2時間以内で勤務時間を短縮できる制度。取り方は15分刻みで決めることができる。

育児部分休業取得者も、そうでない者もお互いが協力し合って業務を遂行し、お互いが感謝する気持ちを忘れず仕事を行っている。

「育児部分休業取得者が増え始めたころ、もう帰るの？といった、フルタイムで働く看護師の不満が噴出しました。でも、『お互いさま』の心を持つこと、PNSでは対等な立場で相手を慮る気持ちを持ち帰宅時間になったら声をかける。それがいつのまにか『組織風土』になっています。私も子育てをしながら働いていましたので、子育

ここがスゴイ！PNSと職場環境充実

福井大学医学部附属病院看護部の強みは、独自に開発した看護提供教育の充実に努めています」

看護師の教育は段階的に行われる。まず、新人看護師には、集合研修による看護技術のシミュレーショントレーニングを中心に実施し、「科学的根拠のある看護ケア」を実践できるように指導する。2～3年目の看護師には、看護だけでなく、自己を振り返って看護実践に繋げる教育や、退院を見据えた看護過程を展開できるスキルを取得できるよう教育する。4年目以降も、役割研修などがあり、一人前の看護師を目指し、継続的な教育支援が行われる。

また、結婚・出産・育児などのライフイベント、認定・専門看護師の資格取得、大学院進学など、看護師それぞれが選択するライフスタイルに合わせた働き方や成長を促している。

ての大変さ、やりくりの方法をわかっているつもりです。私も『お互いさま』という気持ちを大切にしたい」

アイデアとコミュニケーションで職場改善

育児休業については、最長3年間取得でき、休業期間は取得者の希望で決められる。そして、育児休業からの復帰者向けに、各部署において部署特有の疾患・検査・治療に関する学習資料が作成され、早期に職場適応し、安全に業務ができるよう配慮する。

また、10年前に、「ユニフォームの色分け」というアイデアにより看護師の時間外労働を大幅削減した。以前は白いユニフォームのみだったが、日勤は白色、夜勤は紺色のユニフォームに変更。定時終了の意識を高めるとともに、「本来の勤務時間帯なのか、残業しているのか」が周囲から分かるようにした。その結果、時間外に用事を任されることが減ったという。

「働きやすい職場環境の基本は、良好なコミュニケーションであると私は考えています。日ごろより、スタッフのちょっとした変化を見逃さず対応するなど、人間関係を良くすることを心がけています。例えば、前看護部長時代、「1on1ミーティング」を、看護師長に向けて開始しました。看護部長が師長たちの思いを丹念に聴き、主体的な行動に結びつけ、メンバーの成長を支援していくものです。私が看護部長になり、話を聴いてもらう立場から、話を聴く側になったのですが、どのように率直な思いを聴くかコーチングの大切さを感じています。同じ悩みを抱えている看護師長さんがいることに気付き、同じ思いをしている者同士を繋ぐことも私の役目であり、職場の問題解決に繋がるとよいと思い実践しています」

手術室での貴重な学び。スタッフへの支援

諏訪看護部長が看護師の道を考えるようになったのは中高生の時期。

「母と姉が自宅で祖父を介護し、最期は家族で看取りました。当時、私にできることはほとんどありませんでした。家族の絆の強さ、人の死と向き合うこと、そして看護や介護の尊さに触れることができました」

諏訪看護部長は福井大学医学部附属病院に入職して数年後、手術部勤務となり、看護師人生の半分以上をここに務めた。「手術室に関わる先生や先輩から学んだことは、数え切れません」

命がけで手術を受ける患者、その思いを受け止める医師の覚悟、麻酔で意識が無い患者に対して寄り添う先輩から手術看護への醍醐味を教えていただきました。また、機械出しを手際よく行い、外回り看護師と協力する事で、手術が100%うまく進み、患者が回復に向かう。「これで無事に家へ帰れるよ」という喜び。さらに、諏訪氏に対し、「スムーズに手術介助ができたね」という医師からの「承認」の声は、励みとなり、向上心に繋がったと言う。「手術部での学びを活かし、今は私も、スタッフに『承認』の声を掛けるようにしています」

「いろいろな業務を見渡すと、重複する業務があることに気付きました。そうした無駄を見つけて業務の効率化を図っていく必要があります」、さらにこう続ける。「少子高齢化のいま、人材確保のためには、働きやすい職場環境を整えることが第一だと思います。では、働きやすい職場とは、どんな職場かと言いますと、先ほど患者さんが『その人らしく』いられる看護という話をしましたが、看護師もまた、『その人らしく』働き続けられる職場であると考えます。やりがいや誇りを感じながら、60歳を超えてもどう働くかを考えることが大切だと思っております」

看護職員と看護師を目指す方へのメッセージ

かつて、看護師の仕事は「3k」などと揶揄され、過酷と言われていたが、今ではそうではない、と諏訪看護部長は語る。

「私達看護師は、人として看護師として、患者さんとどう向き合うべきなのかを探求し続けています。看護師は、診療のことだけでなく、患者さんの全体を考えなくてはいけない。そうでなくては、より良い看護に繋がりません。看護は、1回限り、なんですね。個々の患者さんごとに看護は変わるものであって、それが看護師の仕事の魅力だと思います」

「私の好きな言葉は、『継続は力なり』です。どんな小さなことでも、やり続けることで実を結び成果につながります。私は、人としても看護師としてもまだまだ未熟であり、どんなことでも努力を続けていきたい、必ずそこには自分が目指す未来はあると思います」

また、「看護師になりたいという人たちに、いっしょに働きましょう、と伝えたい」

諏訪万恵看護部長の未来を見据えたリーダーシップが、福井大学医学部附属病院看護部をレベルアップする。

Connecting The Life

福井厚生病院　院長

服部昌和

おしゃれで親しみやすいイメージを刷新した新病院

福井市の医療圏をＪＲ北陸本線（現：ハピラインふくい線）と足羽川を境にして四分割してみると、南東の部分には大きな病院が存在しなかった。１９８３年にそのエリアに開設されたのが医療法人厚生会　福井厚生病院だ。

創業の精神は「地域にやさしい病院」。病院にとどまらず、健診、介護、福祉など、さまざまなところからやさしさを実現しようと、開院当初は夜９時ごろまで診察を行ったり、１９９２年には県内でいち早く「訪問看護ステーション」の立ち上げ、開院10年目には「ストレスケアセンター」（精神科）も開設した。その後、福井市からの依頼で「地域包括支援センター」を受託、サービス付き高齢者住宅の開設など、時代の要請に応じて、病院以外のさまざまな医療サービスにも力を入れ、現在では17の施設がある。

２０２２年５月には新病院が稼働。一度見たら忘れられない、特徴のある外観は、雪のぼんぼりのやさしい感じをイメージして設計されているそうだ。外観だけでなく、自然光を取り入れるなど、明るい館内も〝病院〟のイメージを大きく変えている。

〝人〟と〝仕組み〟により強みを発揮できる病院

病院の〝やさしさ〟を具現化しているわかりやすい例の一つとして、独自の巡回バスの運行や透析患者の送迎サービスがある。

「免許返納で病院へ来るのが大変な高齢の透析患者もいます。そんな方のために当院では送り迎えをしています。高度急性期病院ではなかなか行き届かないところまで配慮しつつ、『やさしさを出していきたい』とするのが、病院全職員のモットーです。車も人も準備をしなければなりませんが、地域を守り、貢献してきたという自負から頑張っています」と、２０２２年４月に就任した服部昌和院長はにこやかに話す。

さらに、さまざまな疾患に対応できるよう診療科を増やしたり、多疾患併存の高齢の患者にコンパクトに、しかも高いレベルで対応できる体制づくりにも余念がない。

「当院には21の標榜科目があります。心臓カテーテルアブレーション治療で県内トップクラスの実績がある循環器内科や、骨折した高齢患者に対して急性期の手術やリハビリ、療養という長い目で対応し、理学療法士を増やしてリハビリにも力を入れている整形外科、精神科では最近増えている適応障害も積極的に受け入れ、リワーク（就労支援）までを院内のチームが行っています。病院がリワークまでやっているところはそうはないと思います。このように幾つも柱を持っていますが、それを支えてくれているのは人です。さらに、2本、3本と治療や医療サービスの柱が出せる仕組みを持っているのが当院の強みだと思います」

21の科目と17の関連施設があるが、「それらをつなぎ合わせたら１＋１ではなくて、もっと大きな力になります。そういうところをさらに伸ばしていけるような組織にしていきたい」と話す。

守備範囲を広げて、地域から頼られる存在に

高齢の患者が増えてくると、多疾患併存のため、外科手術で悪いところを取ったら終わりとはいかなくなる。守備範囲をさらに広げ、それらをつなげていくことが、これからのこの病院が目指す姿となる。そのような連携によって、高度急性期病院や中小の病院、診療所、介護施設などでは対応できないこと「全ての受け皿になる」というのがこの病院のねらいでもある。その本領が発揮されたのが、コロナ禍の時だった。

「どこもいっぱいいっぱいで困っていた時に、なぜか当院が頼られたんですよ。難しい患者さんも多く、入院コーディネートセンターからは『服部先生、何とかなりませんか』と頼られました。でも、それは悪いことではなく、逆にこちらからもお願いしたこともあったりして、とにかく、あの時はありとあらゆるチャンネルを使いながら乗り越えていきました」

そんなコロナ禍で、院長自身が一番感じたことは、職員のポテンシャルの高さだった。確保病床の看護には立候補で入ってもらったそうだが、多くの人が手を挙げてくれた。

「今でこそＣＯＶＩＤ-19って病

態がわかっていますが、最初の頃は得体が知れなくて、どういう状況かもわからない中で、日夜交代で献身的にしてくれたことに対して、職員の皆さんに大変感謝していますし、誇りに思っています」

混乱する中でも、病院としての決定事項をスムーズに伝えるための仕組みができたことなど、「コロナによって、いろいろなことに気づくことができたのも事実で、今後にも大いに生かせます」と振り返る。

人を診ることの大切さを教えてくれた名田庄での経験

自治医科大学を卒業した服部院長は、卒業して3年目に医師一人だけの名田庄診療所（福井県大飯郡おおい町）に2年間赴任した。

「2年間しっかり初期研修を受けましたが、1人では十分な診療ができるような状態ではなく、わからないことだらけで、とにかく不安しかありませんでした。それでも地域の人たちにとてもあたたかく迎え入れてもらい、あの村で医療との向き合い方を学ばせてもらいました。私の医療の原点で、今でも、つらいことやうまくいかないことがあると、フラッと名田庄を訪ねることがあります。行けば当時のことが鮮明によみがえり、原点回帰できます」

自身の経験から導き出された、〝若いうちはそういった経験をするといい〟、〝総合診療はもっとやるべき〟などといった持論は、機会があるたびに、若い人たちにも伝えるようにしていると言う。

「大学では、心臓、消化器などと臓器ごとの縦割での教育しか受けていませんが、実際は複数の疾患を持った高齢の患者が多く、プライマリ・ケアがきっちりできた上で、その専門があるという形が大切なのです。そのことは大学で教えるのが難しいので、当院くらいの規模の病院がそれを伝えていけたらいいのではないかと思っています」

医師の高齢化という問題も顕著化しつつある。きつい外科や産科、小児科などは若い人からは選ばれにくく、高齢の医者が増えてきている。

「若い人たちに魅力的だと思ってもらい、定着してもらうためにも、自分ができることをやらなければいけないと思っています」

がんに関する2つの日本一に関わることができた

大学を卒業して以来、ずっとがんに向き合い続けている服部院長。2016年の「がん登録等の推進に関する法律」の施行前、福井県はがん登録精度で30年間日本一を続けてきた。院長は大学卒業と同時に関わり、その30年を見続け、博士論文のテーマにもしている。

また福井県立病院に在籍中、2010年からは平能康充医師（現在は埼玉医科大学教授）と二人で、発表されて間もなかった単孔式腹腔鏡手術を大腸がん患者に先進的に行い、6年間で約900症例という、当時日本トップの症例数を施行。難度の高い手術を安全に行っている点が国内外で高く評価された。

さらにがんに関して院長が力を入れたいと考えているのが「がん教育」だ。できるだけ早いうちに正しい知識を教育すべきと、文部科学省が推進するもので、福井県でもガイドラインができている。院長は、直接学校に赴き、ご自身が話をしたいと考えているが、それが実現できたのは4校だけ。手応えはあったそうだが、「その次が続いていかない」と残念がる。それでも、がん教育は絶対にすべきだという強い信念があり、「ライフワークにして、これからも機会を探していきたい」と話す。

人を思い、想像しながら診察することが信条

服部院長が診察する際、注力していることは〝想像力を働かせること〟だと言う。服装や喋り方、診察室に入ってくるスピード、付き添いの有無など、観察で見えてきたことから想像力を働かせる。

「そうすると、この人は帰しちゃいけないとか、この検査までやっておかないといけないとか、あとで後悔するかもしれないというのがわかるんです。そういうトレーニングをずっと自分の中でしてきましたので、わかるんですよ」

職員たちのポテンシャルの高さを実感している院長は、その見える化を考え、6月から急性期病床74床を出来高請求から包括評価制度（DPC）に変更した。これによってこの病院が全国の中でどのくらいの位置なのかがわかるようになるそうだ。

「自分たちがどれだけレベルの高いことをやっているのかを職員の皆さんに伝えて、モチベーションを上げています」

ウェルビーイングを追求していく

これからは、〝どれだけ幸せと思えるか〟ということが重視されるように、世の中は変わっていく。多疾患併存の高齢者の場合、若い人と同じガイドラインで決められた手術をすると、かえって寿命を縮めるというデータもあり、今までいいと思ってきたことが害だったと言う話も出てくる状況だ。病気は完全に治せなくても、〝できるだけ家族と一緒に過ごすようにする〟など、治療に対する考え方が変わってきていると言う。

「この人の場合、ウェルビーイング（well-being）は何かということを、一つ一つ考えていきたいと思っています。そうすれば、『あの病院は手術するだけ』ではなく、手術するしないも含めて、『次の段階へコネクトしてくれる』と思ってもらえるようになります。これがこれからの医療のありようなのだろうと考えていますし、そのニーズはどんどん増えていくでしょう。その時は100点満点の医療ではなくても、後で『これで良かった』と思ってもらえるような医療をやっていきたいです」

夜の帳が下りるころ、暗がりの中に浮かび上がる、明かりが灯った新病院は、まさしくぼんぼりを想起させる。風雪が強い日でも、中に入ればホッとできる——。地域の人たちにとって、病気で困ったときは、あそこに行けばきっと守ってもらえると思われる、そんなぼんぼりのような存在であり続けるために、病院一丸になっての切磋琢磨の日々は続く。

NIPRO

ニプロは、います。
世界のみんなの命のそばに。

eco

新領域に果敢に挑み、
さらに多くの人々に信頼される NIPRO をめざしています。

Medical supplies for the world population

ニプロ株式会社
〒566-8510 大阪府摂津市千里丘新町3番26号

医療を支える。
人と地域の未来のために。

私たちが幸せな人生を歩むために、医療は、必要不可欠です。
しかし、世の中の変化とともに、医療は今、多くの課題を抱えています。

医療人材の採用から育成、キャリア支援、仕組み作りまで
私たち MCS は、HR（ヒューマンリソース）の分野で、医療の課題解決に向き合います。
医療関係者、生活者、地域社会、その未来のために。

「地域」と「医療」の架け橋として ヒューマンリソースの問題をトータルで支援する

スギ薬局グループ

mcs
Medical Career Support

詳しくは WEB へ

neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

発行／スギメディカル株式会社